

分解性能10倍の 光学顕微鏡開発

静大グループ

た。同教授は「電子顕微鏡で確立した技術を応用しており、扱いやすいのが特徴」と説明している。

今回の開発は、文部科学省の知的クラスター創成事業に採択された「浜松・東三河地域オプトロニクスクラスター」の一環として実施。三月末に中国・上海で開かれた、光学顕微鏡に関する国際会議で発表した。

静大と科学技術振興機構が六月十一日に東京都内で開く「新技術説明会」でも披露される。

静岡大学工学部の川田善正教授らの研究グループが、従来の約十倍の分解性能を持つ新しい光学顕微鏡を開発した。生きた細胞内部での微細な物質の反応や変化について観察できるようになり、創薬分野への応用が期待できるといっている。

創薬分野へ応用期待

これまでの光学顕微鏡の分解性能は五百ナノメートル程度だったが、(一ナノは百万分の一ミリ)程度だった。これまでの電子顕微鏡を使えば、〇・一ナノ程度の分解性能を得られるものの、顕微鏡内を真空にしたり、金属膜で試料を覆ったりする必要があり、生きた試料を観察することができなかった。川田教授らは、電子線を光に変換する蛍光